

1568年9月12日付けのイエスの聖テレサに宛てた

アヴィラの聖ヨハネの手紙に関して

この手紙は、イエスの聖テレサが『自叙伝』をヨハネに検閲依頼をした返答であることは明らかです。テレサが『自叙伝』を書き終わって、この作品をアヴィラの聖ヨハネに検閲してもらうことを強く望んでいました。1565年にドミニコ会士ガルシア・デ・トレドに宛てた手紙にそのことが書かれています（現在残っているこの手紙は1562年6月となっているがこれは『自叙伝』の最初の編纂日といわれている）。

「私は博士（アヴィラの聖ヨハネ）がこれをごらんになるように、はからってくださることを強く望んでいます」（『自叙伝』1991年2月20日初版10刷559ページ）。

テレサは1554年の回心の恵みを受けて以来、神の神秘体験を受けるようになりました。その中で、アヴィラの知識人たちから疑問視を受けることとなります。当時はこのような神秘体験を悪魔の仕業とも見ていたからです。結局、この神秘体験から1562年8月24日にアヴィラの町に聖ヨセフ修道院（サン・ホセ修道院）を創立してしまいます。この創立に当たり、聴罪司祭たちの命令により『自叙伝』の再編集が始まりました。この作品を完成させたのが1565年です。しかし、この作品はテレサの検閲者たちの手に渡り、検閲されます。この検閲者の中で重要人物となるのがドミニコ会士たちで、筆頭にドミンゴ・バニェス師がいました。テレサはほかの人の検閲も望んでいました。それがアヴィラの聖ヨハネです。

結局、テレサは自らアヴィラの博士ヨハネに検閲を依頼しますが、最初の依頼はアヴィラの博士が受け付けなかったようです。テレサへのアヴィラの聖ヨハネの手紙が2通残っていますが、最初の手紙が1568年4月2日付けで、アヴィラの検閲官たちが行っている以上、自分が検閲する必要がないという辞退の手紙です。しかし、テレサはドニャ・ルイサの町であるマラゴンに第三の修道院創立した後、ルイサがアンダルシアへ旅に出るときに『自叙伝』を託し、アヴィラの聖ヨハネに見てもらおうことにしました。この返事の手紙が1568年9月12日付けのこの手紙です。内容を要約しますと以下の通りです。

- 『自叙伝』はいくつかの点に教化するものが含まれている。

- しかし、多くの人を読むものではない。なぜならば、神秘体験を理解できる人と理解できない人がいるからである。また、このような体験を通して神が導くのは個人的なものであるからである。
- 祈りの教えは評価できる。恍惚の体験の中にも真理を見出すことができる。
- しかし、どこからともなく聞こえる内的外的言葉についてと内的外的ヴィジョンについては人を誤らせることがある。また、霊的事柄も悪魔から来るものか神から来るかの識別が難しいし、主である神からのものであるかどうかを判定するために多くの規定を必要とする。
- しかし、これは、聖書や教会の教えに従っているので神からのものと言える。
- 想像的幻視について言及しているが、アヴィラの検閲官たちがテレサに与えた罵倒を浴びせよという命令にアヴィラの聖ヨハネはいき過ぎた命令であると同情の言葉を添えている（『自叙伝』29章に関すること）。
- しかし、このような幻視を自ら要求しないように、この幻視を与えないように御主に懇願することも勧める。
- しかし想像的幻視が続く場合は、「謙遜」の徳を身に着けて教会の教えに従うべきという。このような幻視に対して無関係のごとく振る舞うように。
- しかし、神の愛（ヨハネの第一の手紙 4:8 に言及して）は人間の人知を超えていることを認識する必要を説く。人間には不可解なことでも神の愛の働きが行われる＜神秘＞を認めること。
- この『自叙伝』の評価は、神の愛の御業によって、自分のみじめさを知り、自分の欠点を矯正していることである。このような幻視という神秘現象に聖性の道があるのでなく、神への慎ましい愛と隣人への愛の増加にあることを説く。そして、『謙遜の徳』と神の愛の学習をするようにし、幻視を称賛しないように。称賛は天におられるイエス・キリストと秘跡の中におられるキリストのみを称賛するように。
- 最後に、テレサの祈りの道が続けるように励まし、用心の伴った義の道を歩んで、主なる神の愛が与えられたことと自分自身を知ったことと十字架の愛と償いの愛を知ったことに感謝をささげるように勧める。また聴罪司祭たちの助言を大切にするように。
- 最後にアヴィラの聖ヨハネがこの手紙を書かせたのがテレサの祈りであることを実感して、テレサにヨハネ自身のためにも祈りを依頼して終わる。

以上がこの手紙の内容ですが、テレサのその後の作品の中にアヴィラの聖ヨハネの忠告がところどころに出てくることから、テレサは忠実に聖なる博士の忠告を守っていたと考えられます。特に「神の愛」と「謙遜」、そして「自分を知ること」などを通して神の愛における聖性への道を祈りの道に繋げているこ

とは、テレサのどの作品にも見られることです。